

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720058

研究課題名(和文) 日露戦争の錦絵と写真—1900年代における戦争の表象—

研究課題名(英文) The representations of the Russo-Japanese war in Japan in the 1900s:  
A comparative study of woodblock prints and photographs

## 研究代表者

向後 恵里子 (KOGO ERIKO)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・講師

研究者番号：80454015

## 研究成果の概要(和文)：

本研究は、日露戦争(1904-05年、明治37-38年)に際して作り出された様々な戦争の表象のうち、錦絵と写真という2つの印刷技術によるメディアと表現に着目して、双方の制作/製作と受容/消費の具体的な様相を調査・考察するものである。

本研究の調査によって、従来未調査の部分が多く残されていた日露戦争の表象について、具体的な考察をすすめることができた。近世から生き長らえていた錦絵と、近代に力を伸ばしてゆく写真とは、双方ともに戦争に対して注がれる人びとのまなざしを反映して展開し、技術の発展とともに移り変わっている。一方で、両者が重層的な関係を結んでいる様相が明らかとなった。

## 研究成果の概要(英文)：

The purpose of this study is to examine the representations of the Russo-Japanese war (1904-1905), by comparing the production and consumption aspects of woodblock prints and photographs about this war.

This study deepens our understanding of these little-known representations. Both the woodblock prints survived from the pre-modern age and the photographs growing in the modern society are developed and changed reflecting the mass gazes and the technology expansion at the war. Simultaneously, this study reveals a multilayered relationship between woodblock prints and photographs.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学/芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：美術史 芸術諸学 表象文化史 戦争と文化 日本近代史 戦争の表象 錦絵  
写真

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究の動機

日露戦争(1904-1905年)は、国力の総動員と兵士の大量死という事態を生じさせ、20世紀的帝国主義戦争の幕を開いた(大江志乃夫『日露戦争と日本軍隊』1987年)。この未曾有の規模の戦争遂行に際し、自らが「国家の一員」であるという国民意識の形成が進んだと指摘されている(井口和起『日露戦争の時代』1998年)。この形成に寄与したのが、様々なマス・メディアにおける様々な戦争の報道であり、また視覚的表象であった。マス・メディアにおける戦争の表象——とりわけ視覚的な表象をまず通じて、日露戦争は人々の前に可視化され、受容されていった。

この可視化のプロセスは、19世紀から20世紀へと移りゆく社会と技術の趨勢を反映し、また形成の途上にある国民意識と連動するかのよう、揺れ動き、多様なあり方を見せている。特に、先の日清戦争(1894-95年)では人気の的となりながらも日露戦争では不振をかち、報道媒体としては衰微の一途をたどった錦絵と、戦地で撮影された従軍写真が日に日に掲載媒体を増やし、写真帖が次々と出版された写真とは、多くの点で対照的である。それぞれの表象メディアにおける、凋落と興隆の趨勢は、日露戦争の時期に決定的となった。錦絵と写真の交代のあり方は、日露戦争の表象に見られる特徴をうかびあがらせ、当該期において戦争表象に求められた意義とその変容の様を示す好事例であると考えられる。

### (2) 研究の学術的背景

日露戦争については、政治史・軍事史の視点に限らず、メディアや文芸などの文化的側面を視野におさめた研究が近年目覚ましく積み重ねられている(『日露戦争スタディーズ』紀伊国屋書店、2004年等)。同時代資料の調査・出版も、日露戦争百周年の際に進められた様々な活動によって増加した(『ヨーロッパから見た日露戦争：版画新聞、絵葉書、錦絵 日露戦争百周年記念展覧会』図録、2005年等)。

その一方で、日露戦争における視覚表象の研究は、いまだ基礎的な調査の不足が見受けられる。とくに日本近代美術史においては、日清戦争や昭和期の戦争についての近年における研究の進展に比較すると、日露戦争についての調査分析はいまだ限られている(丹尾典典・河田明久『イメージのなかの戦争：日清・日露から冷戦まで』岩波書店、1996年)。これは、日露戦争では近代美術の通史として広く読まれた石井柏亭の『日本絵画三代志』(創元社、1942年)において、日露戦争には「有力な画家」が従軍せず、「後生に伝ふるに足る」戦争画が作られなかったため、美術に影響をさほど与えなかったと説明されたまま、再考される

ことが少なかったためと考えられる。

代表者はこうした現状を受けて、2007年度より「日露戦争期における視覚イメージ研究」(科学研究費補助金(研究代表者)・若手研究(スタートアップ)・課題番号19820030・平成19-20年度)の助成を受け、新聞・画報雑誌・絵葉書・絵画作品などの広範なメディアの基礎的調査を行った。この調査によって、日露戦争期における豊かな視覚イメージの様相を確認することができた。多くのイメージは熱狂をもって迎えられ、メディア自体の流行や発行部数の拡大を呼んでいる。なかには、大衆的なメディアを得手とし縦横無尽に活躍する画家も登場している(拙稿「東城鉦太郎—日露戦争の画家」『近代画説』17、2008年)。

この研究を通じ、新たな課題が浮かび上がってきた。それは、日露戦争の時期にあって、衰微しいわば敗れていった表象の形態——錦絵と、あらゆるメディアを席卷するかのよう、興隆した表象——写真である。錦絵と写真とは、「日露戦争期における視覚イメージ研究」では主要な調査の対象とはしていなかったが、調査を進めるうちにおのずとその重要性が理解されるようになっていった。両者の趨勢はきわめて対照的であり、かつこの日露戦争の時期に特有で、他の時代には見られない。ゆえに、この交代劇のなかに、日露戦争の表象を考察するための重要な視点が含まれていると考えるにいたった。

## 2. 研究の目的

### (1) 研究の目的

本研究は、日露戦争に際して作り出された様々な戦争の表象の中から、とくに錦絵と写真に着目して、双方の制作・製作と受容・消費の具体的な様相を調査し考察するものである。この両者を対象とするのは、近世から生き長らえていた錦絵と、近代的背景のもとに力を伸ばしてゆく写真、この二つが交代してゆく様をとらえ、日露戦争の表象について多角的な考察をこころみるためである。

### (2) 研究の範囲

1904年の日露戦争開戦から06年の凱旋までを日露戦争期として設定し、当該期に出版された錦絵と撮影・発表された写真を調査の対象とする。それぞれの受容の様相、視覚イメージ自体の分析、出版・流通・消費といった社会の中での動きを調査する。これらの情報を博捜し、基本的なデータを整備した上で、その意義を考察する。

### (3) 研究の特色と意義

本研究は、これまでの代表者の日露戦争の表象についての研究成果を直接的に引き継ぎ、また新たな視点を加えて発展させるものである。日露戦争の視覚イメージについての包括的調査の達成のみならず、20世紀初頭の表象文化と社会をめぐる状況に関しても、新

しい知見を与えることを目的とする。本研究の終了時には、日露戦争の視覚表象についてのメディアを横断した見取図を描くことができよう。

1 (2) 研究の学術的背景で触れたように、日露戦争について、また戦争の表象文化というテーマについては近年研究の進展がめざましいが、日露戦争期についてはいまだ基礎的調査のおよばない部分がある。とくに美術史の領域においてはその傾向が顕著である。こうした状況にあって、本研究は、主に次の二点において特色と意義を有する。

まず、従来活用されがたかった多様な同時代資料を発見・分析し、同時代の美術史研究に資する点である。資料整備の点から貢献する部分が多いと考える。第二に、作家・画派中心の視点ではなく、日露戦争を中心にすえた社会的視点から、この時代の表象文化研究になんらかの貢献を果たす点である。この社会的視点からの考察は、戦争という事象を前に、作家をふくめた多くの人々が、いかに制作と受容——生産と消費の双方向から参加し活動したかを浮かび上がらせることとなる。これは、20世紀初頭の社会において表象文化が果たした一つの役割を、社会とのかかわりの中からとらえなおすところみである。

### 3. 研究の方法

本研究の対象は、日露戦争の錦絵と写真である。前述の研究目的を達成するために、以下の方針に従って調査を進めた。調査の結果はデータベースとして整理し、対象の比較と分析もあわせて行った。

#### (1) 錦絵

日露戦争期の錦絵については、出版の状況についての基礎的な調査とともに、その画題や描写、表現についての分析が主な課題となった。

##### ① 作品調査とデータベース作成

以下のような錦絵に関する主要な資料・コレクション・展覧会などから、当該期に発行された錦絵の把握と整理、追跡調査を行った。

- ・浅井勇助『近世錦絵世相史』第8巻、平凡社、1936年。
- ・『日清日露戦役回顧錦絵展覧会陳列品解説』市立函館図書館、1938年。
- ・小西四郎『錦絵幕末明治の歴史 12 日露戦争前後』講談社、1978年。
- ・白石克『慶応義塾図書館所蔵 George S. Bonn 蒐集明治錦絵コレクション』(文献シリーズ no. 18) 慶応義塾大学三田情報センター、1988年。
- ・『絵でたどる日本のいくさ ～近代戦争錦絵を中心に～』展図録、埼玉県平和資料館、2000年。

・『描かれた戦争、創られるイメージ—刷り物で見る日清・日露戦争と東アジア—』展図録、和泉市いずみの国歴史館、2010年。

##### ② 版元と絵草紙屋の調査

調査の過程で、錦絵を発行していた版元、またそれを店頭に掲げ、売買する店であった絵草紙屋についての資料の収集もあわせて行った。これらの錦絵の存在を可能にした“場”がどのように変容していったか、そこに集う人々の振る舞いの変化、また精神や趣味の変貌をうかがうことができた。

##### ③ 表象の考察

錦絵には、いったい何が・どのように表現されていたのだろうかという描かれたイメージ自体の考察を行った。また、西南戦争や日清戦争といった錦絵に描かれた他の戦争との比較、また日露戦争時の他のメディアとの比較的視点を導入した。

##### ④ 受容・消費

錦絵が不振をかこったのは、すでに述べたとおりである。その不人気の様子と、どのような批判がなされたのかを、同時代の言説を中心に分析した。不人気を受けた版元の対応にも注意を払いつつ、人々の嗜好の変化を追った。

#### (2) 写真

日露戦争期の写真について、基礎的調査を進めながら分析を加えた。

##### ① 作品調査とデータベース作成

認可を産めて公的に発表された写真と、主要な画報雑誌に掲載されたものを中心に、データを採集しながら可能な限り全体像の把握をこころみる。この作業によって、日露戦争写真の量的な広がりが立ち現れてくると考えられる。

##### ② 従軍写真班と出版の状況

日露戦争の写真は、軍部の許可した「大本営蔵版」のものと、個人が撮影したものとに大きく分けられる。陸軍は陸地測量班が中心となり、小川一真や光村利藻の協力を受けて多くの写真を撮影・発表した。それらは『日露戦役写真帖』として戦争中から連続して発行され、また多くの雑誌誌面を飾っている。海軍においても同様に、軍の統制下に撮影された写真が発表されている。そのほか、大手出版社であった博文館など、民間ジャーナリズムによる従軍写真班も存在する。博文館の写真班は、田山花袋が一員として戦地に赴いたことで有名である。

こうした従軍写真班の活動は、いまだ全貌が明らかではない。防衛省等にのこされた公文書、同時代の報道などを参照しながら、その活動を明らかにする。

##### ③ 表象の考察

錦絵と同様に、何が・どのように表現されているかを考察する。戦争写真の歴史を参照

しながら、技術的な限界もふまえつつ、被写体や構図、撮影の意図などについて分析する。

#### ④ 受容・消費

写真がどのように受け入れられたのかは、戦争写真が当たり前になった時代よりも、同時代の発言が参考になるだろう。『写真月報』（小西本店、1895-）、『写真新報』（写真新報社、1896-）といった写真についての雑誌のみならず、同時代文献からの言説を追う。

また、「写真画報」というような、「写真」をうたった出版の流行からも、様々な写真に対する期待のあらわれがうかがえる。こうした「写真画報」のなかには、実際は写真を用いず、石版画によるイラストレーションを中心に掲載するものも少なくない。写真そのもののみならず、こうした「写真」という言葉をめぐるまなざしも同時に考察する。

#### (3) 比較・考察

以上の調査・考察の成果をふまえ、両者の比較を行う。この比較は、錦絵に望まれなくなったもの、写真に期待されてゆくもの、この二つを明確にしながら進められる。その際、日露戦争の持つ歴史的な特性との結びつきに注意し、20世紀初頭という時代のなかでそのあり方をとらえなおすことを目標とする。

### 4. 研究成果

以上の計画にしたがい、未調査の部分が多く残っていた日露戦争における錦絵と写真における戦争の表象について、基礎的な調査を行った。研究期間には和泉市いずみの国歴史館において『描かれた戦争、創られるイメージ—刷り物で見る日清・日露戦争と東アジア—』展（和泉市いずみの国歴史館平成21年度冬季企画展）が開催されるなど、日露戦争の表象文化研究の進展が見られた。調査は最新の研究成果も参照しながら進められている。その成果は以下のようなものである。これらの成果は、さらなる調査・考察を重ねた上で発表し、博士論文へと結実させる予定である。

#### (1) 錦絵

日露戦争期には、多種多様な視覚メディアが戦争のイメージを掲載し、人々に迎えられた。そのなかであって、ひとり錦絵は不振をかこい、衰微の一途をたどったと指摘されている。日露戦争に先立つ日清戦争時には、戦争錦絵がブームとなったのに比べると、はるかに少ない出版点数と売行きにとどまった。岩切信一郎によれば、日清戦争の新作は約300点を数えたのに対し、日露戦争は約3、40点程度しか新作は作られなかった（『明治期木版文化の盛衰』『近代日本版画の諸相』中央公論美術出版、1998年）。西南戦争、日清戦争と続いてきた、戦争を主題とする木版文化の歴史は終焉し、そればかりか、近世から続く絵草紙店と錦絵の

歴史を閉じることとなったという。

今回の調査によって、現時点で少なくとも100点以上の錦絵の出版が判明した。小林清親による「日露戦争百撰百笑」、竹内豊斎の「露国征伐 戦勝笑話」、「日露交戦紀聞」「日露戦争電報実記」「日露戦争画報」等の連作シリーズをそれぞれ1点と数えても、80点あまりを数えることができる。同時代の画報雑誌や絵葉書の出版点数とはくらぶべくもないが、調査の及ばない範囲を鑑みても、おそらく従来想定されていたよりは倍以上多い錦絵が出版されたと考えられる。

しかし、戦争中の1904年夏の時点で、売行き不振は明らかであった。ために、1904年の後半から錦絵の出版は途端に少なくなる。錦絵の題材は、1905年におこった旅順陥落と日本海海戦を主題とするものを除き、すべて1904年の出版である。とりわけ開戦から半年ほどの戦闘を題材としたものが多い。

この不振を招いた直接的原因として、他のメディアの隆盛が考えられる。錦絵を追いやったのは、画報雑誌であり、絵葉書であった。画報雑誌の口絵には、ちょうど錦絵で見られるような戦闘の光景が描かれていた。しかも、錦絵の素養のある画家のみならず、日本画家も洋画家も、次々と画報雑誌へ借り出されていた。時にそれは従軍して実際に戦地を見た画家の手によるものであり、時にそれは著名な洋画家・日本画家の手によるものであった。

日清戦争のおりには錦絵に期待されていた絵による戦争の報道は、今回の日露戦争では、画報雑誌によってより詳しく、より正確に、より達者に担われるようになった。錦絵の報道という点における存在意義は、ここにおいてほぼ失われてしまったと言えよう。

とはいえ、日露戦争において、錦絵界がある程度の活況を見せ、時流にあわせて出版の好機をさぐっていた点に注目したい。日露戦争錦絵の特徴を整理すると、以下の4点があげられる。これらの特徴は、不振傾向の中で売行きを伸ばそうとこころみだ結果であると考えられる。

#### ① 報道性・実況性の重視

多くの錦絵に、状況を示す文章が書き入れられているが、これは日清戦争と同様である。加えて、「電報実記」や「日露戦争画報」と名づけられたシリーズが散見される点も特徴である。とはいえ、この報道性・実況性は決して事実に完全に即していることを意味しない。伝聞による実際にはありえないような光景も、もっともらしく描写されている。この傾向には、同時代の他のメディア、特に画報雑誌の流行の影響が顕著であると考えられる。

#### ② 日露（敵味方）双方の英雄的表現

日本兵士のみならず、ロシアの将兵もしばしば英雄的に描かれている。これは、日清戦争

争時における圧倒的に弱い“チャンチャン坊主”の描かれ方とは大きく異なる点である。これには、列強に伍し、「一等国」として見られることを目標とした、日露戦争の戦争目的への共通理解が反映したと考えられる。

### ③ 残虐・凄惨な描写の減少

おそらく(ア)(イ)と関係しているものと考えられる。日清戦争錦絵の「絵空事」への反動的な批判も散見され、その対応としても見なすことができるだろう。

### ④ 滑稽画の存在

残虐描写が現象傾向にあるとはいえ、敵の弱さを嗤うような滑稽画の錦絵は日清戦争より継続して発行された。日清戦争において人気を博した小林清親「百撰百笑」が、今回は相手をロシア軍に代えて発行されている。「露国征伐 戦勝笑話」は、この「百撰百笑」の人気を受けて発行されたという(『日清日露戦役回顧錦絵展覧会陳列品解説』市立函館図書館、1938年)。

## (2) 写真

日露戦争期において、写真は撮影・製版技術の進歩とともに、その撮影・鑑賞行為の裾野を大きく広げている。たとえば、出征前の記念撮影で写真館は大繁盛し、さらに「遺影」として用いられるなど、社会の様々な局面において写真の存在が浸透するひとつのきっかけとなっている。なかでも、戦場や兵士、戦地の様子を撮影した戦争写真の流通は、日露戦争における戦争の表象文化の趨勢に大きな影響を与えたと考えられる。

### ① 大本営写真班

開戦を受け、陸軍では陸軍陸地測量士である小倉俊司を班長とする大本営写真班が組織され、従軍が進められた。その班員は、陸地測量部の人員でしめられていたわけではなく、小倉俊司ともう一人の部員吉田市太郎の他は、写真家小川一真周辺の犬塚徳三郎をはじめとした写真技術者である(酒井修一「小川一真と小倉俊司一日露戦争の大本営写真班」『写真明治の戦争』(小沢健志編)筑摩書房 2001年)。

一方、海軍においては、海軍技師市岡太次郎を中心として撮影が行われている。1904年10月には海軍省より写真家光村利藻も旅順方面の戦況撮影を委嘱された。光村のものからは、写真部員上野喜雄らが写真班を組織して出発した(増尾信之『光村利藻伝』光村利之、1964年。『写真で見る光村印刷の95年』光村印刷、1996年)。

小川一真是写真館とともに小川写真製版所、出版所を経営しており、こうした大本営発表の戦争写真は、『日露戦役写真帖』『日露戦役海軍写真帖』として陸軍・海軍とも続々と出版された。また、小川は1905年4月に「日露戦役彩色大写真展覧会」を開催している。150枚の写真を大きく引き伸ばし、画家伊東函嶺の彩色を加えて上野公園五号館に陳列するという報道がなされている(『読売

新聞』1905年2月9日、『写真月報』10(3)、1905年、47頁等)。

日露戦争の期間、この大本営写真班「大本営蔵版」という但書とともに、多数の写真が大本営より発表され、多くの画報雑誌や絵葉書等のメディアにその写真が掲載されることとなる。通信省において記念絵葉書の作製に関与した雪湖樋畑正太郎の回想によれば、写真の貸下げについて指導を行ったのは陸軍参謀本部の堀内文次郎と海軍軍令部の小笠原長生であったという(『日本絵葉書史潮』日本郵券倶楽部、1936年)。

### ② 民間ジャーナリズムの従軍写真班

軍部が派遣した写真班とともに、民間ジャーナリズムも従軍写真班を送り込んだ。博文館につとめていた田山花袋が戦地へ従軍したのは、写真班員という身分のもとである(田山花袋『第二軍従征日記』博文館、1905年)。写真の撮影は、柴田常吉が主任となり亙庫治、関本四郎平の技手が補佐する体制であった(『日露戦争実記』5、博文館、1904年、112頁)。当初『日露戦争実記』への掲載を主目的としていたが、様々な写真が集まる現状を反映して、美しい写真の満載をうたった『日露戦争写真画報』を定期的に発刊するにいたっている。

博文館に限らず、他の出版社も自社の画報雑誌に多くの戦争写真を掲載した。富山房の『軍国画報』では、兵士を現地特派員とし、写真を送らせている(『軍国画報』3、富山房、1904年)。『戦時画報』には、写真家鹿島清三郎(写真家鹿島清兵衛の弟)を派遣したという社告が掲載されている。

これらの従軍写真家の名は、多くほかの従軍画家たちの名とともにあげられ、誌面を彩る視覚材料を読者に約束している。豊富な視覚材料が迅速に届けられること自体が、部数拡大への有効な手段であったことが読み取れるだろう。

### ③ アマチュア写真家の存在

こうしたマス・メディアにおける写真とは別に、写真撮影技術自体の簡便化のため、アマチュアの写真家による写真やアルバムも少なくない。前述した通信省の雪湖も、専門的写真家ではないがカメラを携えて従軍し、後の記念絵葉書の作成に活用している。調査の過程でも、個人的な鑑賞のために作成されたアルバムものこされており、写真という行為の広がりを見てとることができる。こうしたアルバムについては、今後個人的な戦争の記録/記憶の問題という側面から光をあてることが可能であろう。

### ④ 写真イメージの共有

以上のような写真班の活動、および写真をめぐる撮影・鑑賞経験の増大とともに、写真が戦争の報道と不可分になってゆく。流通する戦争写真の絶対量は日清戦争時よりも飛躍的に増大し、一つの同じ写真によるイメー

ジを、同じキャプションや似通った説明文とともに同時に鑑賞する経験も積まれてゆく。たとえば、小倉俊司によれば、戦勝の確定したのち奉天にて撮影された「二元帥六大将」と呼ばれる将軍たちの集合写真が、日露戦争において最も流通した写真であるという(松本福太郎編『写真の今昔』日本写真興業通信社、1935年)。軍人の肖像写真は、様々に複製され共有されたイメージの最たるものであろう。

こうした写真イメージの共有にあたっては、写真製版によるマス・メディア上の複製掲載と大量出版が果たした役割がきわめて大きい。当時の複製技術を反映し、写真をもとに木版や石版で再現したものなど多様な展開も見られる。

このうち、こうした共有された戦争写真は、同一のイメージが教科書や公的な壁画でくり返し用いられることによって、長い間その命脈を保つこととなった。なかには、今日に至るまで使用され続けているものもある。写真による戦争イメージの想起は、日露戦争表象の特徴の一つである。

### (3) 考察一日露戦争の可視化をめぐる

錦絵と写真とは、同時代に作られながら、まったく異なる道行きを示している。一方は衰微し、一方は続々と受け入れられ広がっている。この両者を概観すると、日露戦争の時期において、戦争の可視化をめぐる態度が大きく変容していることがうかがえる。

錦絵においては、報道性・実況性が重視される傾向が観察された。これは画報雑誌の流行によるものが大きいと考えられるが、同時に画報雑誌の強みの一つであった写真材料の豊富さにも結びつくものであろう。戦争を、戦地をできるだけ多く、できるだけ現実にそくした形で見たい、というまなごしの欲望が反映しているものと考えられる。

こうした状況を反映するかのよう、日露戦争期には「写真」と銘打った発行物が多数出版された。それは必ずしも写真を用いず、木版画や石版画によるものも少なくない。写真の使用以上に、写真が内在する現実を写したという写真の側面が重視されていると言えよう。従軍写真家・従軍画家の活躍する出版趨勢とともに、日露戦争はまるで自分が戦地を訪れたかのように人々の前に可視化されたのである。

こうした傾向は、しかしすべての日露戦争表象にあてはまるものではない。錦絵における滑稽画や、個人的な写真アルバムのように、異なる側面から考察すべき対象も多い。これらの多様さは、おそらく日露戦争の内包する様々なまなごしのあらわれと考えられる。

### (4) 今後の課題：表象としての日露戦争

本研究で行った錦絵・写真についての調

査・分析をふまえ、代表者が継続して続けてきた日露戦争期の視覚イメージ研究を進めながら、今後は「表象としての日露戦争」を課題としてゆく予定である。

これまでの研究によって明らかになったのは、日露戦争が、まさに「表象」としてたちあられてゆくプロセスであった。戦争の実態を反映しつつも、様々な立場、多様な階層の人々のまなごしを通じて、戦争は表象され、その表象を通じて戦争はあらためて可視化——認識されていったのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 向後恵里子「光の帝国—日露戦争におけるイルミネーション」早大文学研究会『ワセダ・レビュー』43、査読有、2010年、3-25頁。
- ② 向後恵里子「日本葉書会—日露戦争期における絵葉書ブームと水彩画ブームをめぐる」早稲田大学教育会『学術研究複合文化学編』第58号、査読無、2010年、59-90頁。

〔学会発表〕(計3件)

- ① 向後恵里子「光の帝国—日露戦争におけるイルミネーション」早稲田表象・メディア論学会2010年度第2回学会、2010年11月27日、早稲田大学。
- ② 向後恵里子「第一次世界大戦の図像—1910年代日本における戦争の表象をめぐる」大正イマジユリイ学会第7回全国大会、2010年3月6日、碧南市藤井達吉現代美術館。
- ③ 向後恵里子「日露戦争の従軍画家とその活動」美術史学会第62回全国大会、2009年5月22日、京都大学。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

- i. 向後 恵里子
- ii. 早稲田大学
- iii. 教育・総合科学学術院
- iv. 講師
- v. 研究者番号：80454015

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし